

彦根市埋蔵文化財調査報告 第13集

福 滿 遺 跡

城南保育園改築に伴なう福満遺跡第4次調査

昭和62年3月

彦根市教育委員会

序

彦根市は、この春で市制50周年を迎えることができました。また、これにあわせて「彦根市史」の再刊も行なわれ、これから50年に向けて新たな第1歩を踏み出したところでございます。

彦根といいますと、どうしても目は彦根城に行きがちですが、この地には築城以前にも豊かな歴史があり、連綿と営まれた人々の生活がありました。このことを抜きにして彦根の歴史を語ることはできません。

福満遺跡は、古く縄文時代後期からの時間的な積み重ねが確認されており、新たな彦根市史の貴重な資料であると言えましょう。

過去の人々が生活の中で守り育てて来た文化財を保護し、新たな文化の中に生かして行くことは、現代に生きる私達の責務であります。この資料が文化財の保護と歴史研究の一助になれば幸いです。

文末になりましたが、福満遺跡の発掘調査に御理解と御協力をいただきました社会福祉法人彦根福祉会をはじめ多くの方々に対し厚く御礼を申し上げます。

昭和62年3月

彦根市教育委員会

教育長 河 原 保 男

例　　言

1. 本書は、彦根市西今町 285 - 1 番地に所在する福満遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、社会福祉法人彦根福祉会の城南保育園々舎改築に伴ない、社会福祉法人彦根福祉会の委託を受け、彦根市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和61年度事業として実施し、昭和62年3月で全ての調査を終了した。
4. 本調査は、彦根市教育委員会社会教育課技師本田修平が担当し、実測図等は調査協力員円城伸彦・沢田具高・植野克志（岐阜経済大学OB）が主に行なった。この他、多くの方々の御協力をいただいた。
5. 本調査の出土遺物等資料は、彦根市教育委員会で保管している。

目　　次

1. 位置と環境	3
2. 調査に至る経過と調査方法	4
3. 調査結果	4
4. まとめ	8
出土遺物観察表	10

図　版

図版 1～10	15
写真図版 1～8	25

1. 位置と環境

福満遺跡の今回の調査地点の地番は、滋賀県彦根市西今町 285 - 1 番地に所在し、第4次の調査にあたる。当遺跡は現在までの調査で、縄文時代後期・晩期の土器を多量に出土し、また弥生時代後期の壺が大正時代に出土した事で知られ、彦根市内でも最も注目される遺跡の1つであった。また城南小学校改築に先立ち実施した発掘調査では、古墳時代の住居跡が確認されており、この時代以降の集落跡であるとともに、土塙内より古墳時代後期と考えられる子持勾玉が出土しており、集落内における子持勾玉の存在様式に1例を加えた遺跡である。

この福満遺跡の所在する西今町は、小泉町・竹ヶ鼻町等と共に旧犬上郡福満村に属しており、犬上川旧デルタ上に位置しており、旧村内各所で犬上川伏流水の湧出が見られる。また、福満遺跡・品井戸遺跡等現在までの発掘調査で、犬上川の旧分流と考えられる河跡等を確認しており、現在竹ヶ鼻町の南側を流れている犬上川は、古代においては低地を目指して流れる網状流を成していたと思われる。このことは、犬上川流域に多数の低湿地を形成し、網状に流れる河川の間に低湿地と微高地が点々と各所に広がると言う地形を成していたと予想される。この様な地理的条件から遺跡の存在様式は当然制約を受けており、現在知られる遺跡から考えても、縄文時代後・晩期の小集落の存在する事は確実であるが、弥生時代の大集落の存在する事は現状では考えにくく、大集落が形成されるのはかなり沖積作用が進んでからと考えられる。今まで、犬上川水系で明確な前期古墳が確認されていないのは、このことを表わしているのかも知れない。犬上川北岸で明確な集落跡を確認しているのは、竹ヶ鼻廃寺と福満遺跡でいずれも古墳時代に入ると考えられるが、弥生時代後期の土器を若干出土している事から考えればこの時代まで遡る可能性はある。また、品井戸遺跡では、古墳時代前期と考えられる方形周溝墓を確認しており、犬上川南岸では堀南遺跡で弥生時代後期の方形周溝墓を検出している。従って、この地域で人々の生活が明確に表われて来るのは弥生時代後期以降になってくる。竹ヶ鼻町の椿塚と言われている所は、国鉄東海道本線を建設した時に土取りがなされたと言う事で、その時に須恵器が出土したとのことで後期古墳と考えられる。この竹ヶ鼻町には奈良時代前期の竹ヶ鼻廃寺も所在し、この地域の中心の1つの地域となっている。

2. 調査に至る経過と調査方法

社会福祉法人彦根福祉会は城南保育園の老朽化に伴ない、園舎の改築を計画し、現地での改築ということで当教育委員会に協議があった。当該地は、城南小学校北隣に位置しており、第3次調査として実施した滋賀県住宅供給公社分譲地の東隣であり、当然福満遺跡の範囲内であり、工事を実施する場合は事前の調査が必要であることで協議をした。この結果、事前の調査を実施することで協議を完了し、昭和61年3月15日付けで埋蔵文化財発掘届および発掘調査依頼の提出があった。当教育委員会では、調査契約を結ぶとともに昭和61年5月24日付けで発掘調査通知を文化庁長官あてで提出した。

調査は、旧園舎で幼児の保育をしながら東側の幼児の遊び場に新園舎を建築する計画であったため、調査可能な所にトレンチを設定し遺跡を把握することとした。また、保育園児・小学生がトレンチに落ちる事故を防止するために、柵を作り調査地を囲むこととした。新築面積は約1,000m²であったが、遊戯場や排水路・プレハブの保育室等があり、また土置場等を除くと実際に調査可能な面積はほぼ500m²であった。設定したトレンチは、現保育室東側にかなり広い場所があり約10m×30mのトレンチを設定し第1トレンチとした。この他、建設予定保育園舎が「L」字状に東側に伸びることから、市立城南小学校運動場のバックネット東側に2ヶ所のトレンチを設定した。

現地における調査は、昭和61年6月から防護柵を作り始め、同年7月8日に現地における発掘作業を終了した。その後、遺物・図面等の資料整理作業を実施し、昭和62年3月31日に全ての作業を終了した。

3. 調査結果

調査地点は、市立城南小学校用地の地続きで整地して保育園用地を整地しており、表面は運動場整地用の山土で、その下は埋立用の角礫の混じった山土で整地しており、良く縮っていた。第1トレンチの基本的な土層は、表土が前述した盛り土層で約45cmあり、第2層は旧水田の耕作土層で約35cmある。第3層は旧水田の床土で黄褐色粘質土層であり、この面が遺構面になるが、床土になっていた関係かどうか全体によごれており、本来の意味で言う地山とは思えない。東側のトレンチでは、用地の端になる関係か盛土層がやや薄く約25cmで、第

2層の旧水田耕作土も約20cmになり、第3層は基本的には暗灰褐色粘質土層で第4層は砂礫層になりここを若干掘り下げるとき湧水がでて来る。この第3層の粘質土層からは灰釉陶器の塊が出土した。この事は、この地点が犬上川に関連する旧河道であり、第3層が堆積する時点では低湿地になっていた事が考えられ、出土した遺物は、福満遺跡からこの時点で流れ込んだ事が考えられる。この様な状況は、市立城南小学校プール改築工事に先だつ発掘調査時にもプール用地東南端で確認しており、福満遺跡の東側の範囲を示しているものかも知れない。ただし、「位置と環境」で述べた様に、この地域は犬上川の網状流と低湿地・微高地が点々と広がる地形と考えられることから、軽々に遺跡の範囲を言うのは現時点ではさしつかえない。

今回の発掘調査で遺構が検出できたトレンチは第1トレンチだけであり、以下第1トレンチについて述べてみたい。

第1トレンチを設定した地点は、福満遺跡の第1次調査で住居跡等を確認した地点から東に約75m、第2次調査で多量に縄文時代晚期の遺物を出土した地点から北に約100m、第3次調査で縄文時代後期の遺物を多量に出土した地点から東南に約20mの所にあたっており、最も遺構が検出できる可能性の強い所である。トレンチは現保育園舎に沿って並行する様に設定し、東北側に遊戯具があるため、およそ8m×38mの広さで設定した。

遺構は、前述した様に旧床地面で検出されたため全体にややよごれており検出しにくい所もあったが、竪穴住居跡と考えられる落ち込み6ヶ所と多数のピット群を確認している。次に各遺構について述べることにしよう。

S H - 1

遺構内の掘り下げ当初はS X - 1として掘り込んだものであるが、その形態等より現在は竪穴住居跡と考えている。遺構検出時点では1辺6mの落ち込み内に焼土や炭化物が暗茶褐色粘質土の埋土とともに見えていたものである。埋土には焼土を中心として極薄いものであったが灰層の広がりも見え、残存状態は悪かったが丸太状の炭化物も若干ではあるが検出された。この事から考えれば、この住居跡は火災に遭った可能性も考えられるが、1棟の住居跡が全焼したとすれば灰・木炭の量が少ない。この住居跡よりの出土遺物は、住居跡東壁側で床面から端部が垂下し脚部に8穴を穿つ器台・「く」の字状口縁を持つ壺が出土している。また、埋土からは細頸壺、受け口状口縁の壺・甕、高坏等が出土しており、弥生時代後半から古墳時代初頭の竪穴住居跡と考えられる。住居跡は前述した様に、1辺6cmの隅丸方形のプランをなし、深さはほぼ30cmで主軸はN-45°-Wである。

S H - 2

トレンチ東端北壁で3つの落ち込みが切りあって検出できたものの西側のもので、掘り込み当初S X - 2として精査したものである。プランは方形であり、1辺5m・深さほぼ30cmを計り、主軸はN-20°-Wである。遺物の出土はほとんどなかったが、プラン等の状況により竪穴住居跡と考えられ、S H - 3を切っている。

S H - 3

前述したS H - 2に切られ、S H - 4を切っていると考えられ、プランは東隅部がピットで切られており明確ではないが一応隅丸方形をなしていると思われる。1辺の大きさは不明であるが、主軸はN-12°-Wで深さ約20cmである。遺物は、須恵器の壊蓋が埋土より出土しており、古墳時代後期のものと考えられる。

S H - 4

トレンチ北壁東端で検出したもので、S H - 3とに切られており、プランは、方形か隅丸方形かは不明である。主軸はN-17°-Wで深さ約10cmを計る。埋土等よりの出土遺物はほとんどなかったが、焼土が1ヶ所あり、若干の炭化物・灰等が見られた。

S H - 5

第1トレンチ南壁東端で検出し、遺構の掘り込み時点ではS X - 4として精査した遺構である。ほぼ10cmを掘り込んだ所で地山と考えられる面が確認でき、遺構はかなり削平されたものであるが、その形態から竪穴住居跡と考えている。埋土からの遺物は、土師器等の小片が極少量出土しているが、明確にその時期を示す様な遺物はなかった。

S X - 5

遺構面を精査した時点で、S H - 1を切り込んだ黒灰褐色粘質土の遺構が検出でき、S X - 5として掘り込んだものである。形態は不整形で、床面も「U」字状になっており、住居跡とは考えにくい遺構であった。埋土内からは土師器の小片とともに、高台の付かない須恵器の壊身が出土しており、奈良時代のものと考えられるが、その性格は不明である。

S B - 1

第1トレンチの西端で検出した掘立柱建物跡で、トレンチ端で柱間2.4mで2間のピットを確認した。この柱列より東側に建物がある可能性も考えられるが、明確ではなくトレンチ

西側に伸びる建物と考えたほうが妥当であろう。ピットは、ほぼ40cm前後の大きさで、主軸はN-34°-Wを計る。

S B - 2

S B - 1とほぼ並行な主軸を持ち、約2.6m東側で検出したもので、2間×2間の総柱の建物跡と考えられる。ピットは直径50cm以下のもので、梁行2.4m・桁行2.6mを計る2間×2間の建物で、主軸はN-32°-Wである。この建物跡のピットで住居跡を切ったピット内からは、高台が断面三日月型をなす灰釉陶器の塊が出土しており、平安時代の遺構であることが考えられる。

S B - 3

S B - 2から4.5m東側のトレンチ中央部で検出した遺構で、このS B - 2とほぼ並行して存在する2間×2間の総柱の建物跡である。ピットは60cm前後の直径を持ち柱間は2.6mを計り、主軸はN-32°-Wである。S B - 2・S B - 3とともにトレンチ南壁際でピットを確認しており、一応2間×2間の建物と想定しているが、南側に1間伸びる可能性もある。

S B - 4

トレンチ中央部の東側で南壁側で検出した遺構で、現状では2間×2間の掘立柱建物跡であるが、トレンチの南側に伸びていると考えられる。ピットは40cm前後の径を持ち、梁行1.6m・桁行1.7mの柱間を計り、主軸はN-12°-Wである。

S B - 5

S B - 3から6mの間隔をもって並行し、S B - 4と切り合ったかたちで検出した遺構で、現状で2間×2間の掘立柱建物跡である。ピットは方形のものを主とし1辺50cm前後の大きさを持ち、柱間は2.2mを計り、主軸はN-32°-Wであった。ただし、現状では2間×2間であるが、トレンチ北側に伸びる可能性も考えられる。

S B - 6

トレンチ北端で検出した遺構で、S B - 4と並行している、現状で2間×1間の掘立柱建物跡で、ピットは40cm前後の径を持ち、梁間2m・桁行2.8mの柱間を計り、主軸はN-12°-Wである。トレンチ北側に建物跡は伸びている可能性が考えられる。

以上、約300m²の第1トレンチで竪穴住居跡5棟・掘立柱建物跡6棟を確認し、その他性格不明の土塙・ピット等を検出した。

竪穴住居跡は、そのプランから2つにグルーピングする事が可能である。1つは隅丸方形プランのSH-1で、その出土遺物より弥生時代後期後半から古墳時代初頭のものと考えられる。他は、方形プランのSH-2~5で、出土遺物より古墳時代後期以降と考えられ、その切り合い状態から2時期以上あると考えられる。

また、掘立柱建物跡は、主軸で2つのグルーピングが可能である。1つは、N-12°-Wの主軸を持つSB-4・6で、ピット内での遺物の出土は見られなかったため、その時期は不明であるが、想像をたくましくすれば、奈良時代と考えられるSX-5と1辺がほぼ並行しており、この時代の可能性も考えられる。他のグループは、主軸をほぼN-32°-WとするSB-1~3・5で、ほぼ並行して建てられた総柱建物跡とこの左右に2間×2間以外の掘立柱建物跡があったと思われ、SB-2のピット内から出土した遺物から平安時代の遺構であると考えられる。

以上、各遺構をグルーピングするとほぼ4時期の遺構が同一の遺構面で検出した複合遺跡である。遺構面は前述した様に全体的に汚れており旧水田床土になっていた関係と考えていたが、遺構を掘り込んだ土の感じから言えば、この面は沖積層であると考えられ、一般的に言う地山面ではないと思われる。この関係で遺構が良く見える所と見えにくい所があると思われる。

以前の調査で縄文後・晩期の遺物が多量に出土し、今回の調査で、その時代の遺構が検出される事が期待されたのであるが、今回の調査では確認できなかった。この点については、今後の調査を待ちたい。

4. まとめ

調査結果と重複するが、今回の発掘調査で確認できた事を以下箇条書きにしてまとめにかえたい。

- (1) 遺構面は、第3層の旧水田床土し黄褐色粘質土層で検出されたが、この層は沖積層と考えられる。
- (2) 遺構面を精査中に若干の縄文時代の遺物を確認したが、今回の調査でこの時代の遺構は

確認できなかった。

- (3) 穫穴住居跡は全体的に出土遺物が少なかったが、大きくは2時期に分ける事ができ、弥生時代後期後半から古墳時代初頭と古墳時代後期のものである。
- (4) 掘立柱建物跡は2時期に分ける事ができ、ほぼ並行して建てられている4棟は平安時代と考える事ができ、他のやや規模の小さい2棟は時期を確定する事はできない。
- (5) 調査地東端の沖積地は灰釉陶器等若干の遺物が出土しており、この時代に激しい沖積作用があったと考えられる。

福満遺跡は、今回の調査で第4次調査になるが、まだまだ不明な点が多い。今後この地域の調査が進めば豊かな歴史を明らかにしてくれるだろう。

出土遺物観察表

番号	種類	器形	法量	形態	調査	整	胎土・色調・焼成	備考
1	甕	口径13.3 cm	○肩は張らず、口縁は外反して開き、上方に折り返し、端部に面をつける「受け口」状口縁。	○内外面とも器表剥脱のため不明	胎土：4 mm以下の砂粒を含む 色調：淡黄灰色 焼成：軟	S H-1 (S X-1)		
2	甕	口径14.4 cm	○口縁部は外彎して開き折り返し上方に立ち上がり、端部に面をつける「受け口」状口縁	○外面頸部にハケ調整痕が残るが、他は器表剥脱のため不明	胎土：3 mm前後の砂粒を若干含む 色調：明赤褐色 焼成：軟	S H-1 (S X-1)		
3	甕	口径15.6 cm	○最大腹径が中位部ぐらいいにある器形で頸部はしまりは頸部は外反して開き、上方に折り返して端部を強くなして端部を強くなする「受け口」状口縁をなす。	○内外面ともに器表剥脱のため不明	胎土：良好 色調：濃赤褐色 焼成：軟	S X-5		
4	甕	口径15.6 cm	○肩はあまり張らず、口縁は外反して開き、端部に面をつけて「受け口」状口縁を作り、端部に面をつける「受け口」状口縁をなす。	○外面は頸部下まで横ナデ調整でその下がハケ調整 ○内面は器表剥脱のため不明。	胎土：良好 色調：暗赤褐色 焼成：軟	S H-1 (S X-1)		
5	甕	口径16.4 cm	○口縁部は内彎して開き、端部を上方に折り返し、端部を強くなして端面を作る「受け口」状口縁をなす。	○内面は器表剥脱のため不明 ○外面はハケ調整で口縁端部は横ナデ調整	胎土：3 mm前後の砂粒を若干含む 色調：赤褐色 焼成：軟	S H-1 (S X-1)		
6	甕	口径15.6 cm	○肩は張らず、頸部に至り、口縁は外傾して開き、端部に面を作る。	○内外面ともに器表剥脱のため不明	胎土：3 mm以下の砂粒を若干含む 色調：赤褐色 焼成：軟	S H-1 (S X-1)		
7	鉢	口径16.9 cm	○肩は張らず、頸部に至り、口縁部は外傾して開いた端部を上方に折り返し、丸くおさめる「受け口」状口縁をなす。	○体部は内外面ともに粗いハケ調整 ○頸部、口縁部は横ナデ調整と思われる。	胎土：2 mm前後の砂粒を若干含む 色調：赤褐色 焼成：軟			

番号	種類 器	形 法 量	態 調	胎土・色調・焼成	備 考	
8	壺	底部径 3.95 cm	○小さな底部より体部は開く	○調整法不明	S X—5	
9	甕	底部径 4.3 cm	○底部は凹み底をなしており、体部は外反ぎ みに開く。	○調整法不明	S H—5	
10	壺	口径 16.9 cm	○口縁部は外彎して開き、端部をやや垂下ぎ みに作り、上面を上に引き出しておさめる。	○外面には、器表剥脱のため不明であるが、 内面には、部分的にハケ調整痕が残る。	S H—1 (S X—1)	
11	細 壺	口径 9.2 cm	○頸部は、細くやや外傾しながら直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめる。 ○口縁部外面に弱い凹線を入れる。	○外面には部分的にへらによる磨き痕が残る その他は、器表剥脱のため不明	S H—1 (S X—1)	
12	壺	口径 15.8 cm	○良く張った肩部より頸部は、しまり、外 して開き、口縁部は折り返して上方に立ち 上がる受け口状口縁をなす。	○外面ともに器表剥脱のために調整法は不 明である。	S H—1 (S X—1)	
13	壺	口径 11.4 cm	○体部は肩があまり張らず、球形に近く、頸 部はしまって、口縁部は外反ぎみに開き、 端部をやや折り曲げて上方に立ち上がる。	○外面は粗いハケ調整で口縁部上面はナデ調 整。 ○内面は粗いハケ調整後ナデ調整で部分的に ハケが見える。	S H—1 (S X—1)	
14	壺	口径 9.5 cm	○口縁部は外反ぎみに開き、端部を弱く上方 に折り曲げきみにして端部に面を作る。	○外面下半分はハケ調整で上半分は横ナデ調 整と思われる。 ○内面は不明	S H—1 (S X—1)	
15	壺	口径 11.4 cm		○あまり張らない肩部より頸部はしまり、外 面に刻みを入れた凸帯をつけ、口縁部は弱 く内湾しながら開き端部をやや内傾させる ように立ち上がる。	○体部外面はハケによる調整で口縁部外面は 横ナデ調整 ○内面は不明	S H—1 (S X—1)

番号	種類器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
16	高 壺	口径 26.8 cm	○壺部は内湾ぎみに大きく開き、深く作られている。 ○脚部は「ラッパ」状に開き、3穴を穿つ。	○内外面ともに細いへラ磨き。 ○脚部はしづつて作られ、内面にしづり痕を残す。	胎土：良好 色調：暗赤褐色 焼成：硬	S X-1 (S X-1)
17	高 壺		○血状に凹んだ底から壺部は外傾して開く。 ○底部を弱く垂下させ縦をつける。	○内外面ともに器表剥脱のため不明であるが、内面はへラ磨きと考えられる。	胎土：1 mm前後の砂粒を若干含む 色調：淡白灰色 焼成：やや軟	S H-1 (S X-1)
18	高 壺		○血状に凹んだ底部から壺部は外傾しながら開く。	○壺部外面は部分的にハケ調整痕を残すが、へラ磨きと思われる。 ○底部外面、部内面は器表剥脱のため不明であるが、へラ磨きと思われる。	胎土：1 mm以下の砂粒を含む 色調：淡灰褐色 焼成：やや軟	S H-1 (S X-1)
19	高 壺		○平らな壺底部から壺部は、やや内湾ぎみに開く。	○器表剥脱のため調整法不明	胎土：3 mm以下の砂粒を若干含む 色調：乳赤灰色 焼成：軟	S H-1 (S X-1)
20	高 壺	口径 20.7 cm	○壺部は外傾して開き、端部を断面三角に作る	○内外面とも細く密なへラ磨き調整	胎土：精良 色調：濃赤褐色 焼成：硬	S H-1 (S X-1)
21	高 壺		○血状に凹んだ底から壺部は外傾して開く ○底部は円盤充填	○内外面ともにへラ磨き調整	胎土：1 mm前後の砂粒を極少量含む 色調：褐灰色 焼成：硬	S X-5
22	高 壺		○脚部は「ラッパ」状に開き、4穴を穿っている。 ○底部は、ほぼ平底に作られている。	○内外面とも調整法不明	胎土：2 mm前後の砂粒を含む 色調：赤褐色 焼成：やや軟	S H-1 (S X-1)
23	高 壺		○脚部は「ラッパ」状に開く ○3穴を穿つと思われる。	○内外面とも器表剥脱のため不明	胎土：3 mm前後の砂粒を極少量含む 色調：明褐色 焼成：軟	S X-5

番号	種類器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
24	高 环		○脚部は「ラッパ」状に開き、上下2穴、3対の透かしを穿つ。 ○底部は円盤充填	○外面へラ磨き調整であり、内面は不明 ○内面は不	胎土：良好 色調：灰茶色 焼成：硬	SH-1 (SX-1)
25	高 环 脚部		○脚部は「ラッパ」状に開くと思われる。 ○3穴を穿つていると思われる。	○外面はハラ磨き調整 ○内面は不	胎土：良好 色調：淡灰褐色 焼成：やや硬	SH-1 (SX-1)
26	高 环	脚部径 13.4 cm	○脚部は「ラッパ」状に開き、端部を内側に引き出す。 ○3穴を穿つていると思われる。	○外面は細くて密なへラ磨き。 ○内面は粗いハケ調整	胎土：精良 色調：暗灰黄色 焼成：硬	SX-5
27	高 环 脚部	脚部径 12.5 cm	○脚部は「ラッパ」状に開き、端部を弱く内側に引き出す。 ○3穴を穿つていると思われる。	○外面はハラ磨き調整 ○内面はハケ調整	胎土：良好 色調：明褐色 焼成：やや硬	SH-1 (SX-1)
28	高 环 脚部	脚部径 12.8 cm	○脚部は「ラッパ」状に開き、端部を内側に引き出す。 ○3穴を穿つている。	○外面へラ磨き調整 ○内面 器表剥脱のため不明	胎土：良好 色調：赤褐色 焼成：やや硬	SX-5
29	高 环 脚部	脚部径 14.1 cm	○脚部は「ラッパ」状に開き、端部内面を若干引き出す。 ○外面上には繊細なへラ磨きをほどこしている。 ○外面には文様による弦線で弧文系の文様を入れる。 ○その形状より、一応脚部と考えている。	○外面は細密なへラ磨きをほどこしている。 ○内面は器表剥脱のため不明	胎土：1mm以下の砂粒を若干含む。 色調：暗赤褐色 焼成：やや硬	SX-5
30	器 台	口径15.7 cm 脚部径 12.35 cm 器高 9.8 cm	○脚部は「ラッパ」状に開き、端部内面を弱く引き出し、2穴1対で計8穴を穿つ。 ○受け部は直線的に開き、口縁部を垂下させ4本の弱い凹線を桶状工具で入れる。	○脚部外面はたて方向の細いへラ磨きと思われるが、内面ともに器表剥脱のため不明 ○受け部は内面横方向で外面上にて方向の細いへラ磨きが部分的に見える。	胎土：1mm以下の砂粒を若干含む 色調：赤褐色 焼成：軟	SH-1 (SX-1)
31	器 台		○受け部は直線的に外傾して開く。	○内外面ともに器表剥脱のため不明	胎土：良好 色調：淡黄褐色 焼成：軟	SH-1 (SX-1)
32	壺		c複合口縁の口縁部と思われ、外面にへラによる凹線と列点による刻みと波状文をほどこす。	○内外面ともに磨きと思われるが不明	胎土：2mm前後の砂粒を若干含む 色調：明赤褐色 焼成：やや硬	SH-1 (SX-1)

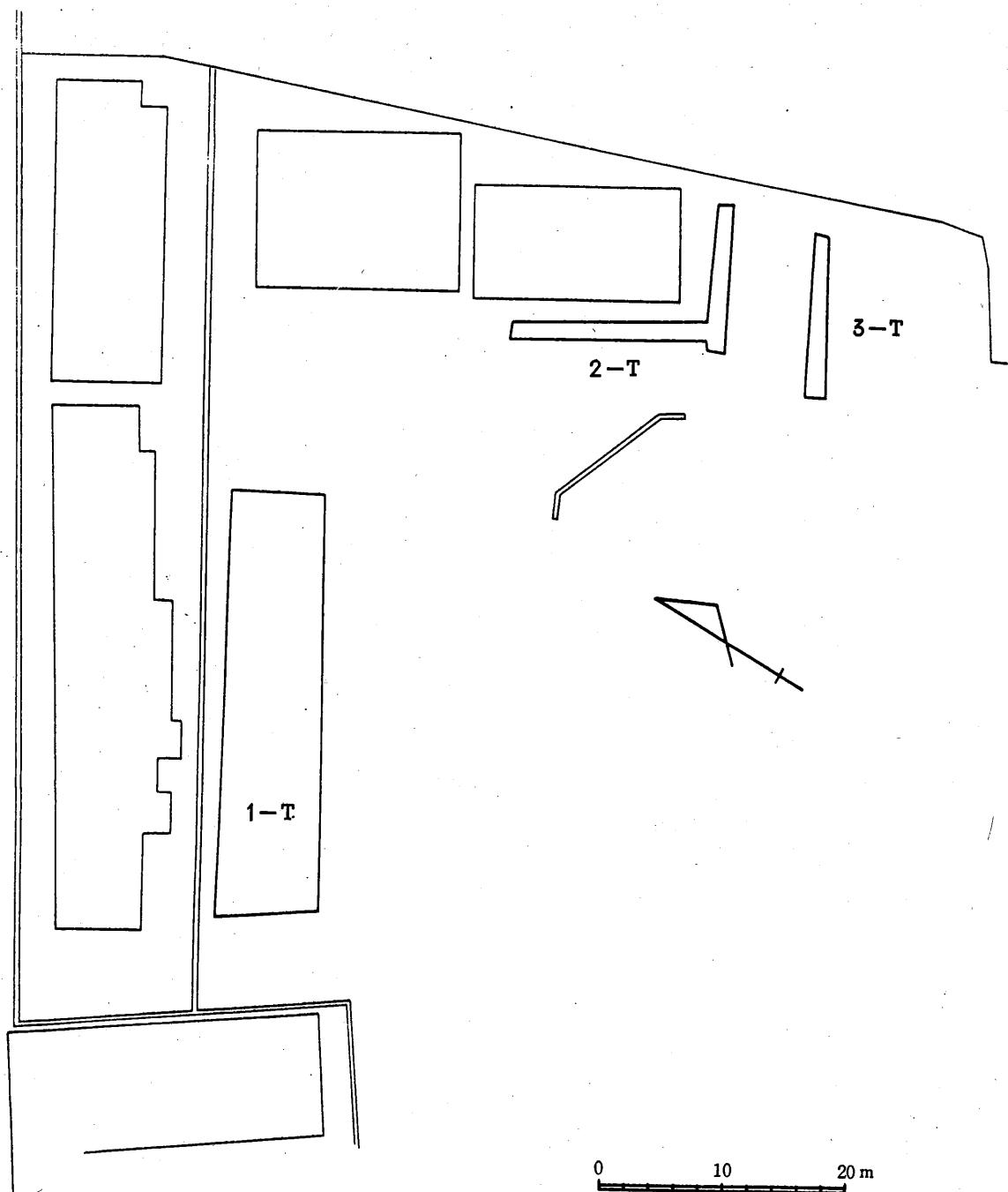
番号	種類 器	法 量	形 態	調 整	胎土・色調・焼成	備 考
33	手捏土器		○底部は不明であり、体部は内弯しながら立ち上がる。	○粘土紐の巻き上げ成形で横ナデ調整	胎土：良好 色調：灰褐色 焼成：硬	S H-1 (S X-1)
34	燒 (黒色土器)	口径17.4 cm 器高 4.6 cm 高台径 φ 3 cm	○高台は断面三角形をなし、体部は内弯して開き、そのまま端部に至り、丸くおさめる。 ○外部口縁下に一条の沈線を入れる。 ○内面および口縁部外面黒色。	○内面は横方向の密なヘラ磨き。 ○口縁部は内外面ともに横ナデ調整 ○高台は張り付け高台	胎土：精良 (雲母片を含む) 色調：茶褐色 焼成：硬	ピット81
35	燒 (黒色土器)	口径13.4 cm	○体部はやや内弯ぎみに開き、口縁部を外反ぎみに引き上げ、端部を丸くおさめる。 ○口縁部内面に一条の沈線を入れる。	○内面は細いヘラ磨き。 ○外面口縁部は横ナデ調整と思われる。	胎土：精良 色調：淡黄灰色 焼成：硬	2-T
36	皿 (土師器)	口径10.5 cm 器高 1.1 cm	○平底の皿部より体部は斜形して開き、端部は横に一旦引き出され、上方に巻き込んで丸く作る。 ○口縁部には内外面に段を作る。	○内外面とともに横ナデ調整であるが、体部外 面は不調整。	胎土：精良 色調：淡黄灰色 焼成：硬	2-T
37	坏 (須恵器)	口径14.7 cm	○口縁部は外反ぎみに作られ、天井部はドーム型をなす。	○外面体部はクロロナデ調整で天井部、ヘラ 削り調整。 ○内面はクロロナデ調整。	胎土：3 mm前後の 砂粒を若干 含む 色調：白灰色 焼成：硬	ピット127
38	坏 (須恵器)	口径12.2 cm 器高 3.1 cm	○平底の底部より体部は外反して開き、口縁部を丸くおさめる。	○内面はクロロナデ調整 ○外面は体部がクロロナデ調整で底部は不調整	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬	S X-5
39	碗 (灰)	高台径 6.5 cm	○高台は「三ヶ月」型をなし、体部は内弯し て開く ○上半部に内外面とも灰をほどこす。 ○底部内面に重ね焼痕を残す。	○内外面クロロナデ調整 ○高台は張り付けである。 ○底部は糸切り底である。	胎土：精良 色調：白灰色 焼成：硬	ピット98
40	碗 (山茶碗)	高台径 7.1 cm	○高台はしつかりとふんばる「三ヶ月」型 高台をなす。 ○体部は内弯しながら開く ○やはりがけで内面は無 ○底部は糸切り	○内外面クロロナデ調整 ○高台は張り付けで端部にモミの灰痕が若干 つく ○底部は糸切り	胎土：精良 色調：乳灰色 焼成：硬	3-T



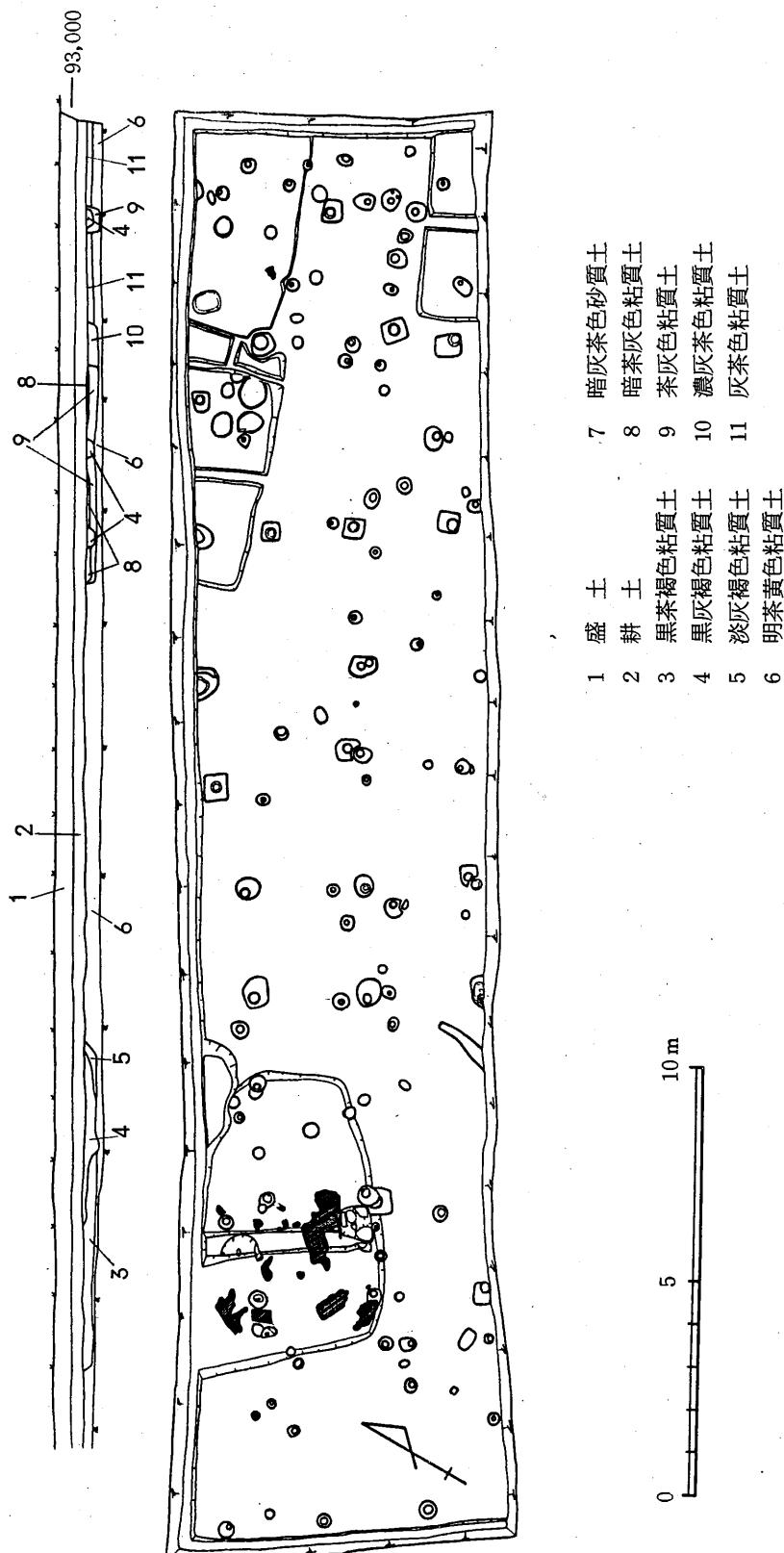
図版1 調査地点と周辺の遺跡

0 1000m

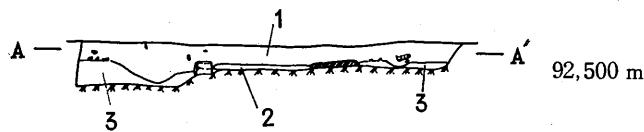
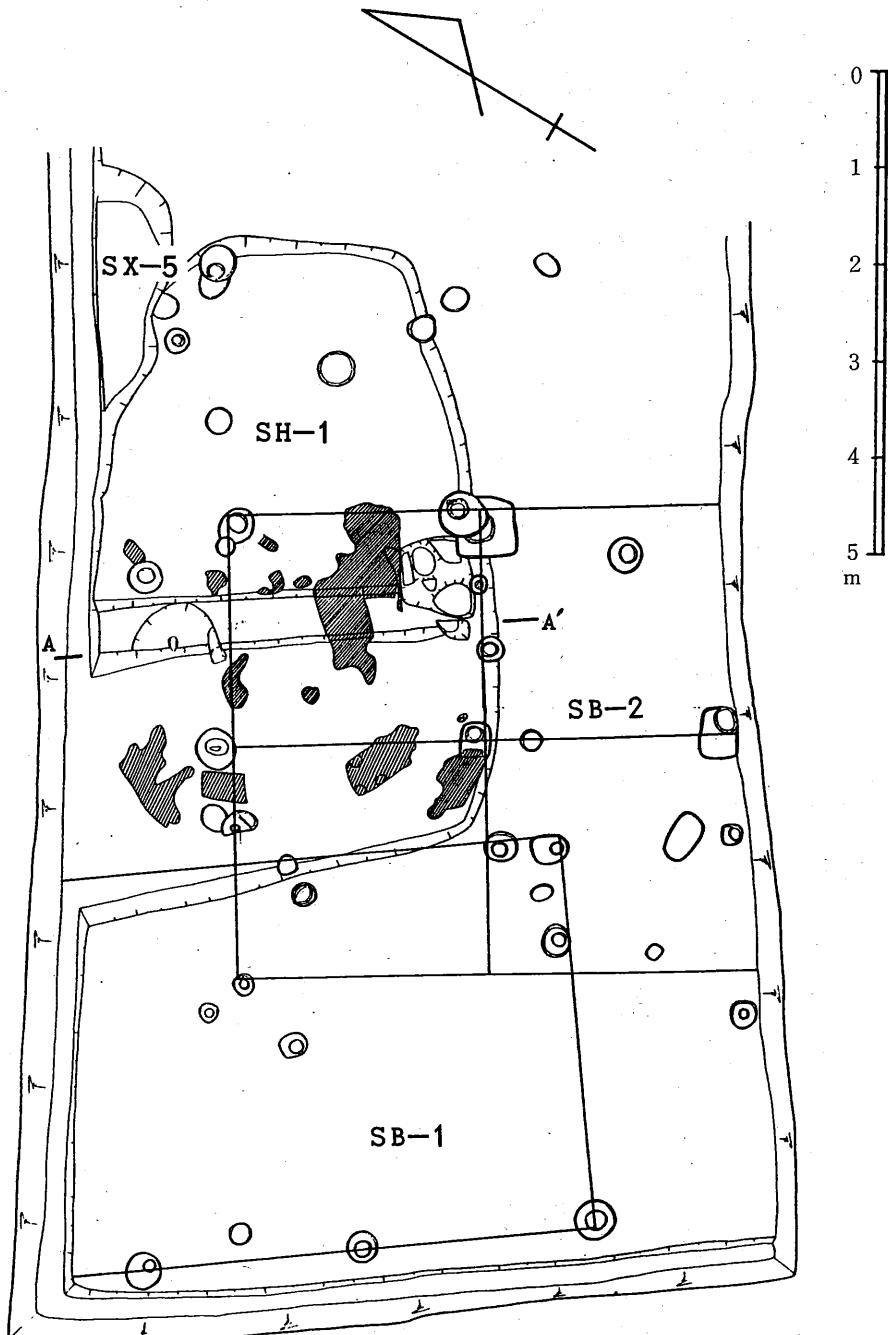
1	觀音山遺跡	10	一ツヤ遺跡	19	西今東遺跡
2	天王山北遺跡	11	木戸口遺跡	20	須川遺跡
3	山畠遺跡	12	山之脇遺跡	21	上沢尻遺跡
4	天王山遺跡	13	遊行塚遺跡	22	門田遺跡
5	天王山南遺跡	14	丁田遺跡	23	横地遺跡
6	雨壺山東遺跡	15	福満遺跡 (今回調査地)	24	石原遺跡
7	雨壺山遺跡	16	品井戸遺跡	25	堀南遺跡
8	東沼波遺跡	17	竹ヶ鼻廃寺	26	蓮台寺城跡
9	道ノ下遺跡	18	椿塚遺跡	27	辻ノ東遺跡



図版2 トレンチ配置図



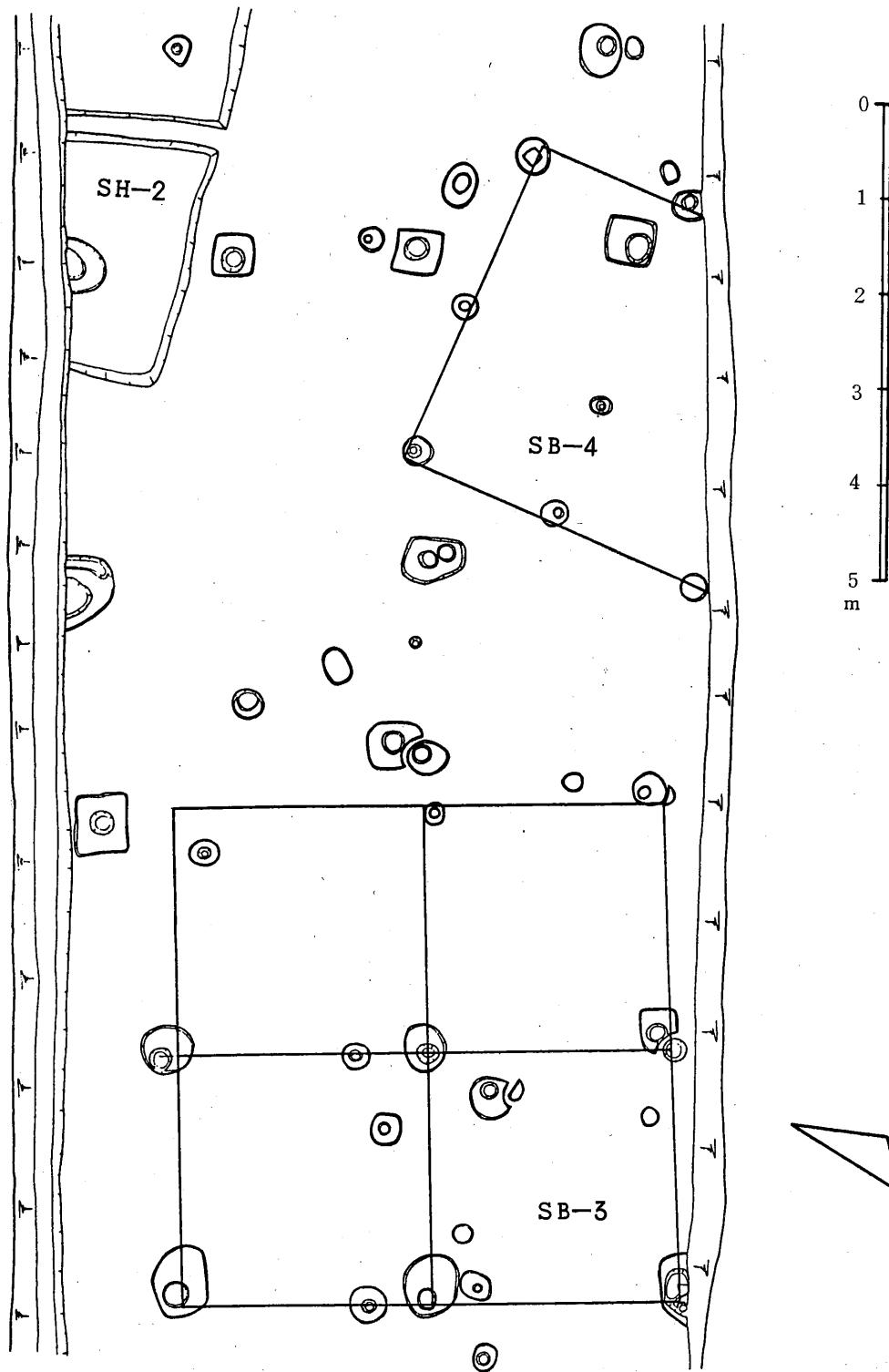
図版3 1トレンチ遺構図



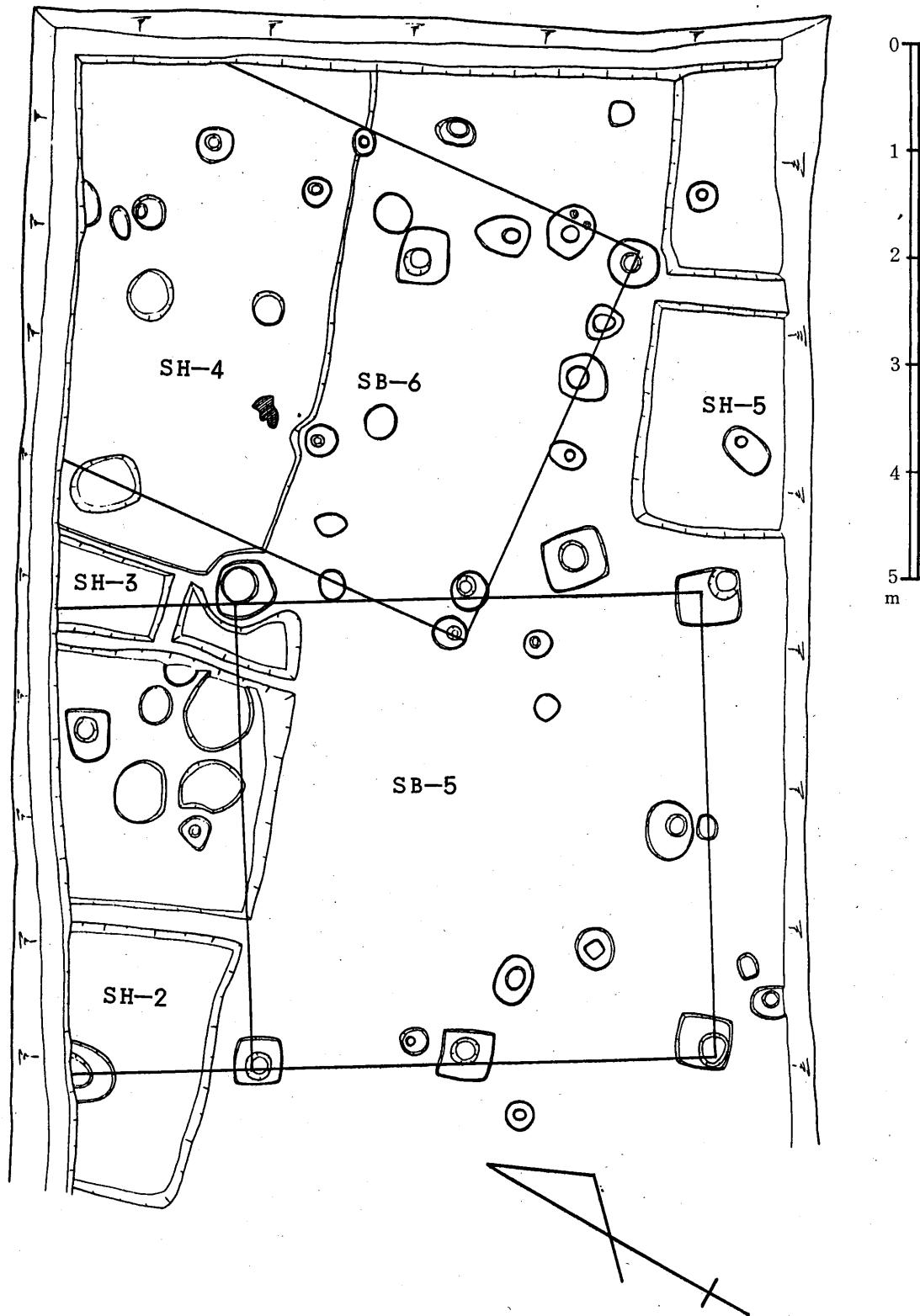
断面図土色表

- 1 黒茶褐色粘質土
- 2 明茶黄色粘質土
- 3 暗灰茶色砂質土

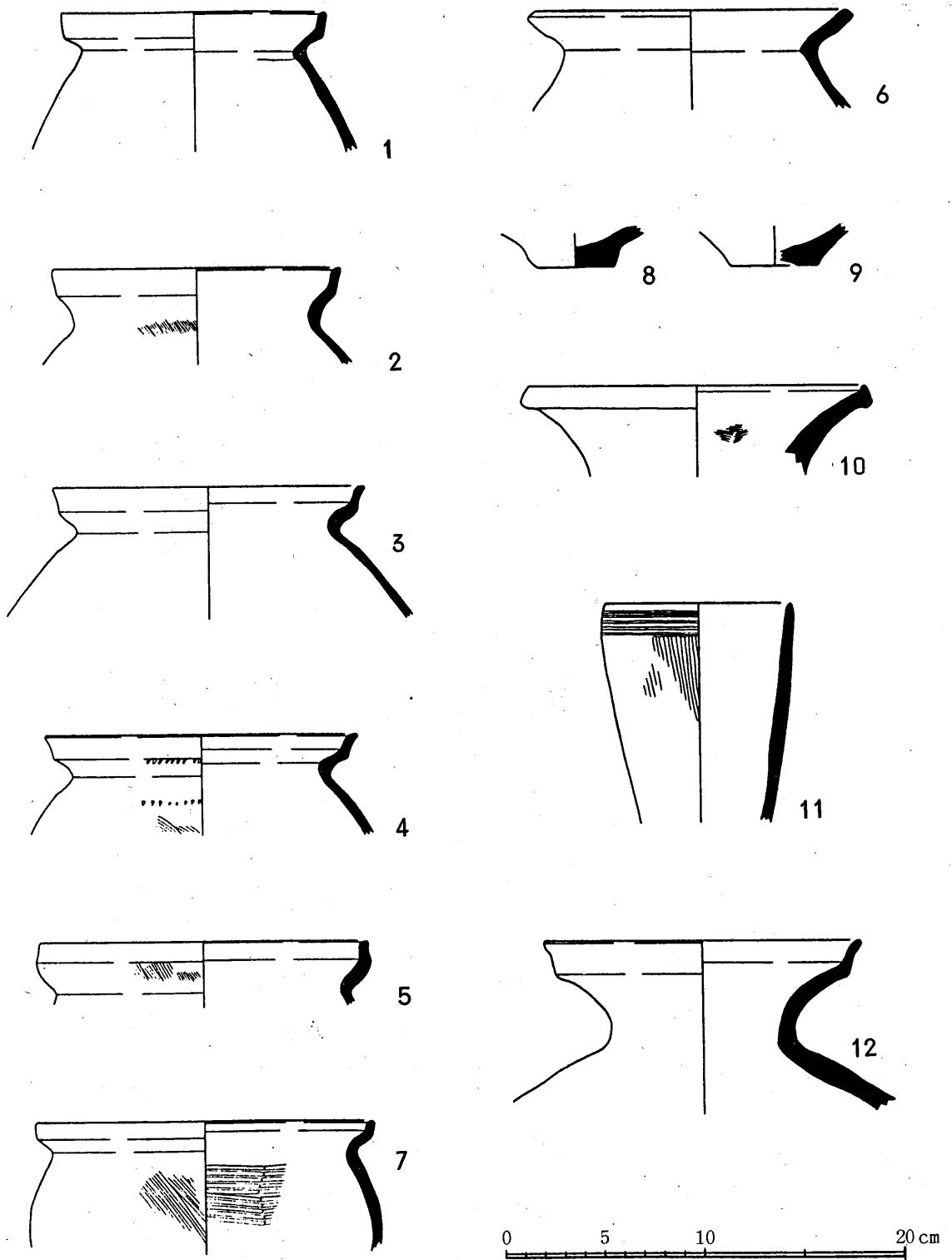
図版 4 SH-1・SB-1・SB-2・SX-5 遺構図



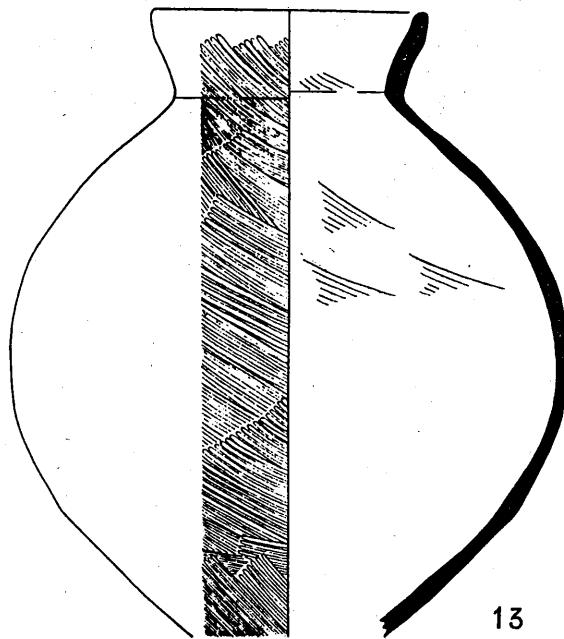
図版5 SH-2・SB-3・SB-4 遺構図



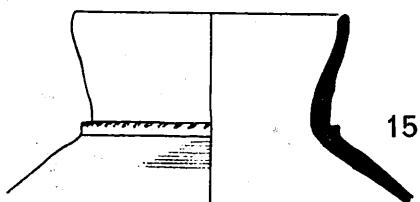
図版6 SH-2・SH-3・SH-4・SH-5・SB-5・SB-6 遺構図



図版 7 出土遺物実測図



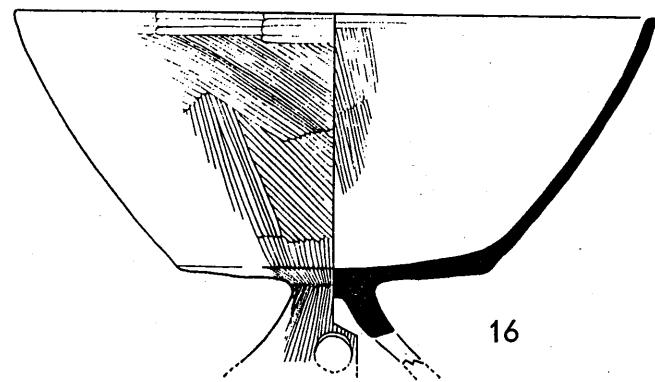
13



15



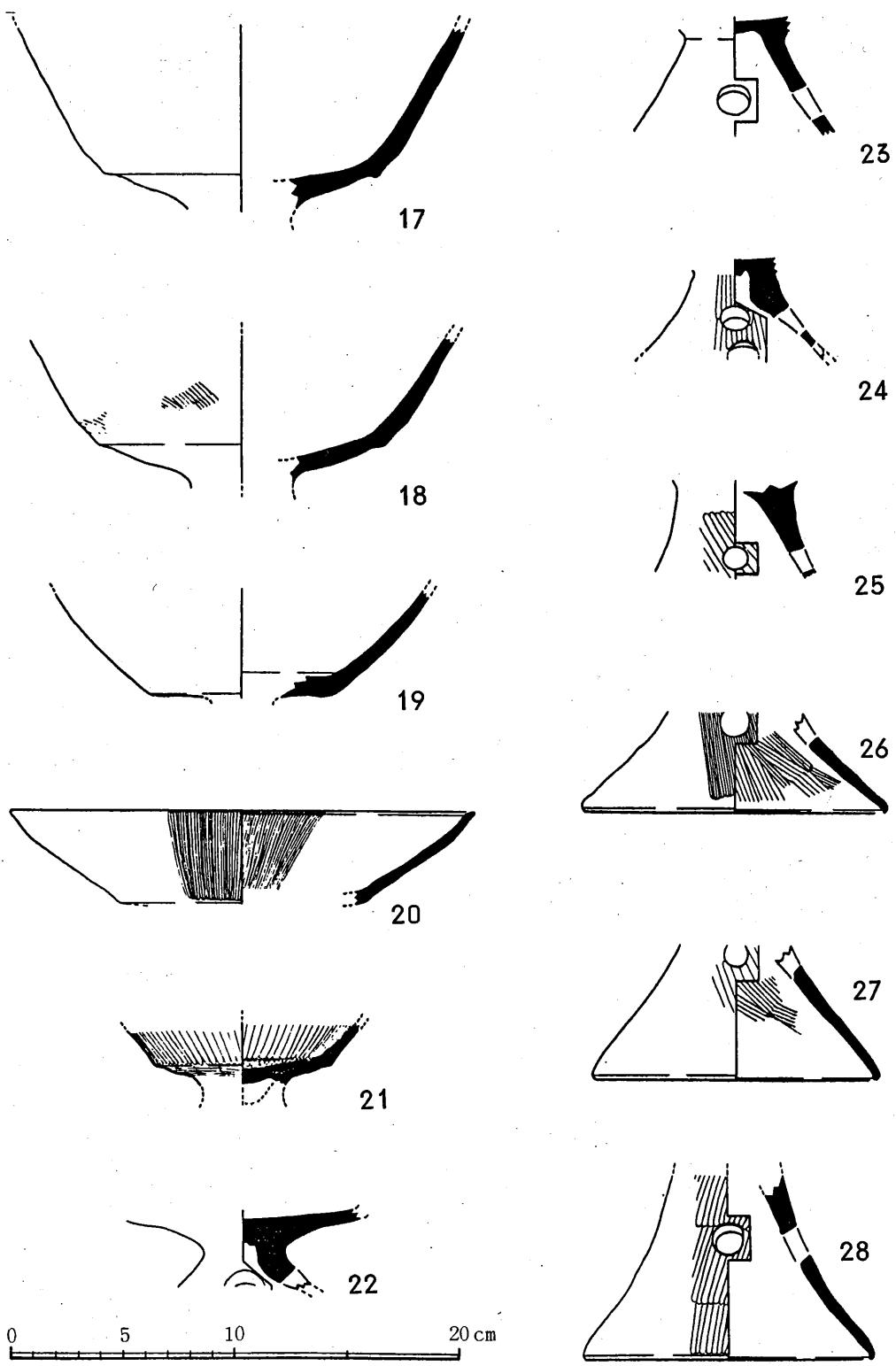
14



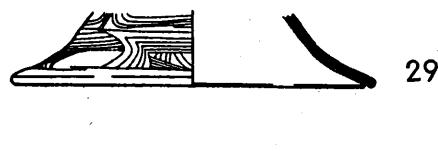
16

0 5 10 20 cm

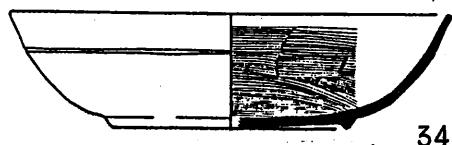
図版8 出土遺物実測図



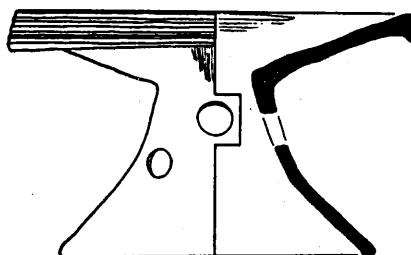
図版9 出土遺物実測図



29



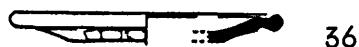
34



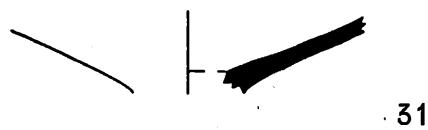
30



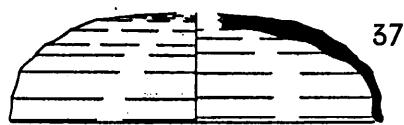
35



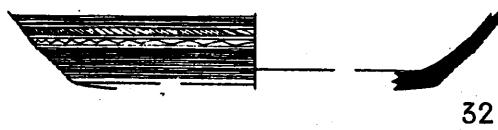
36



31



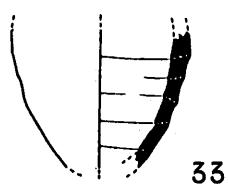
37



32



38



33



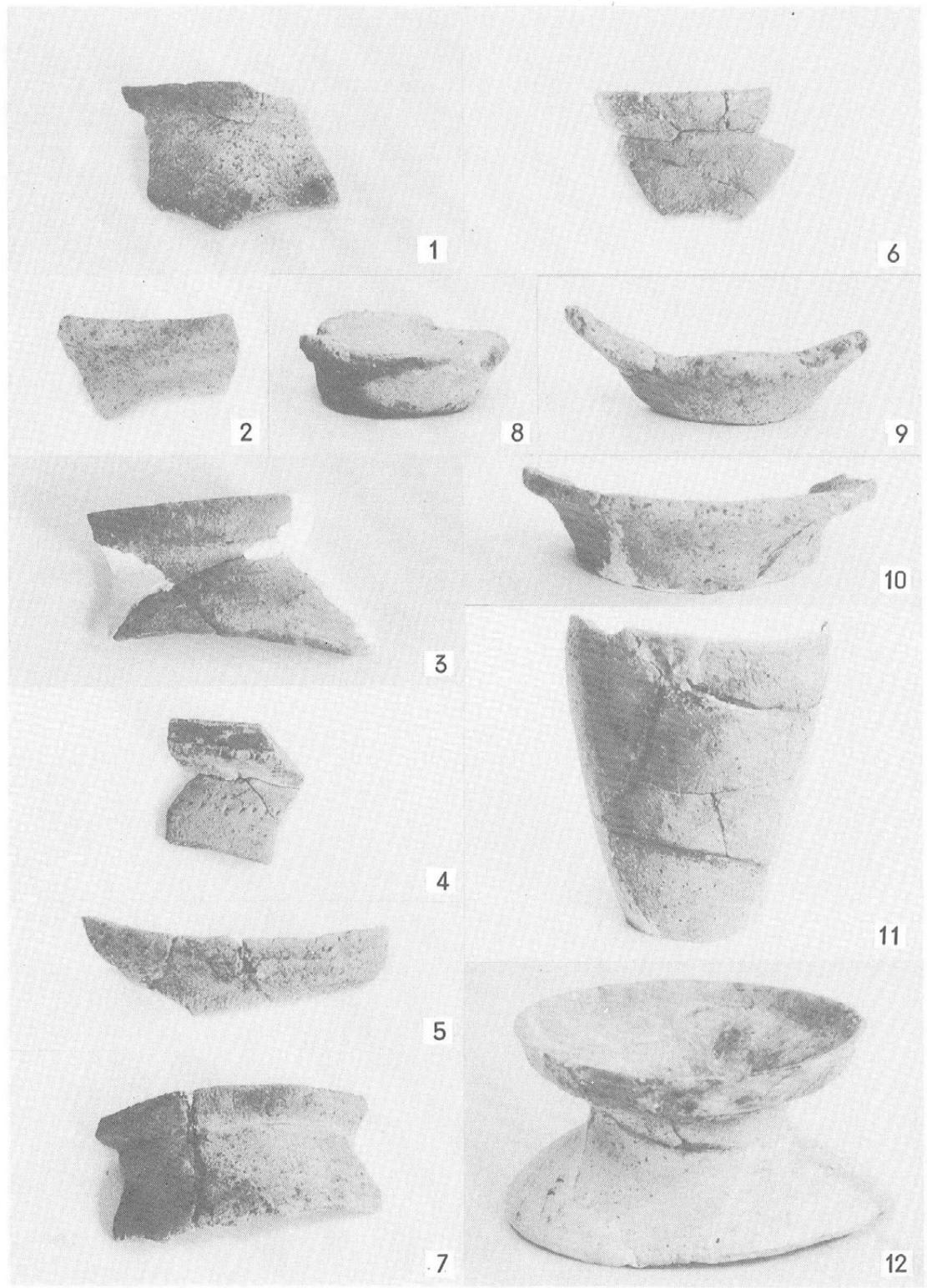
39

0 5 10 20 cm

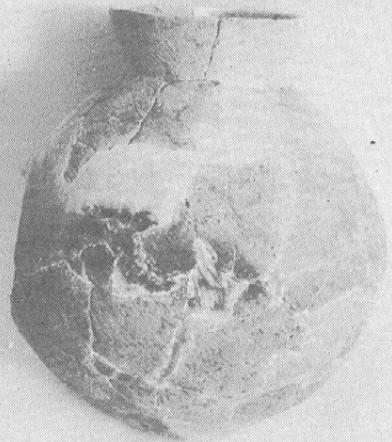


40

図版10 出土遺物実測図



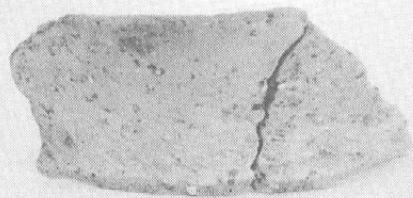
写真図版1 出土遺物



13



15

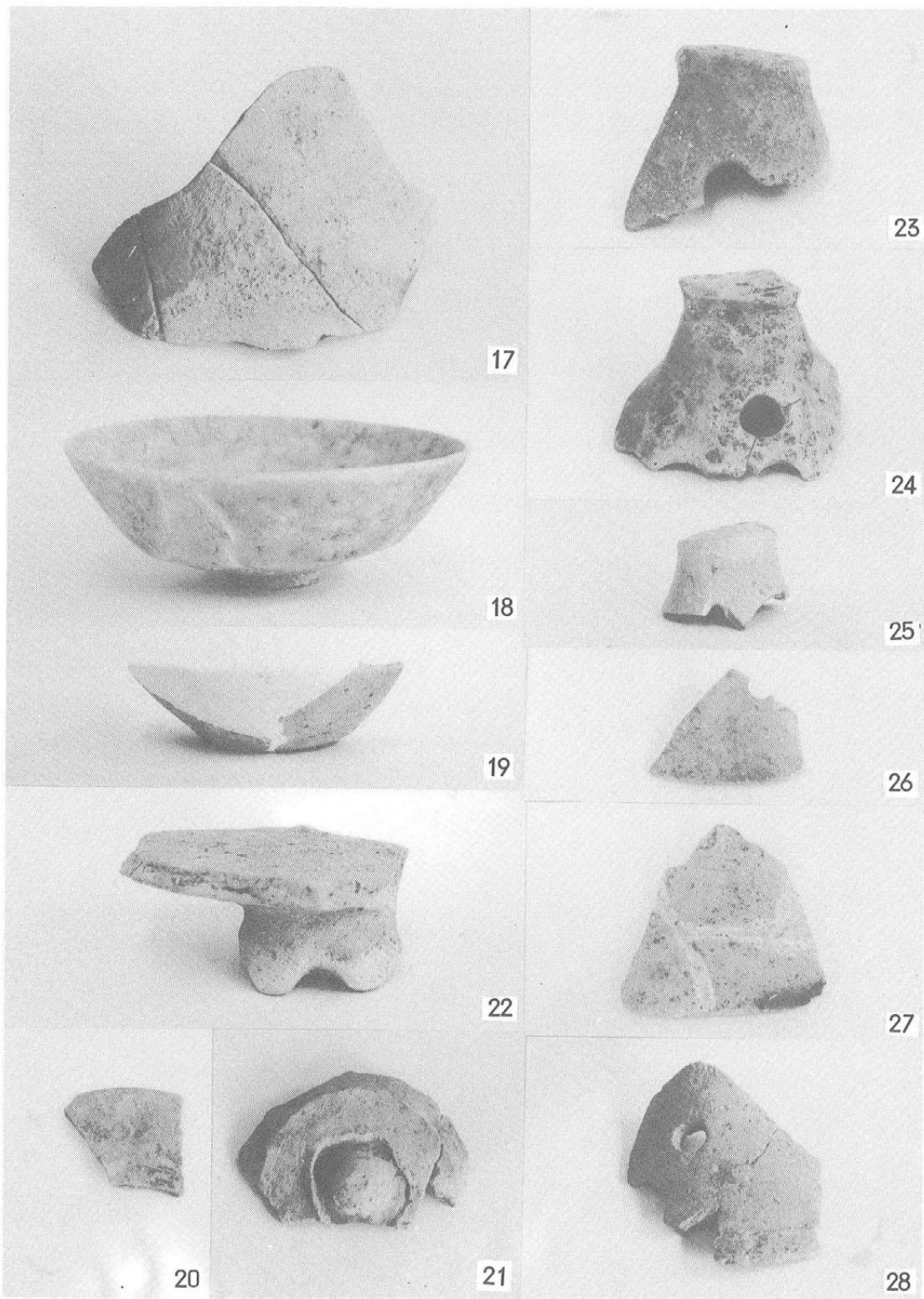


14

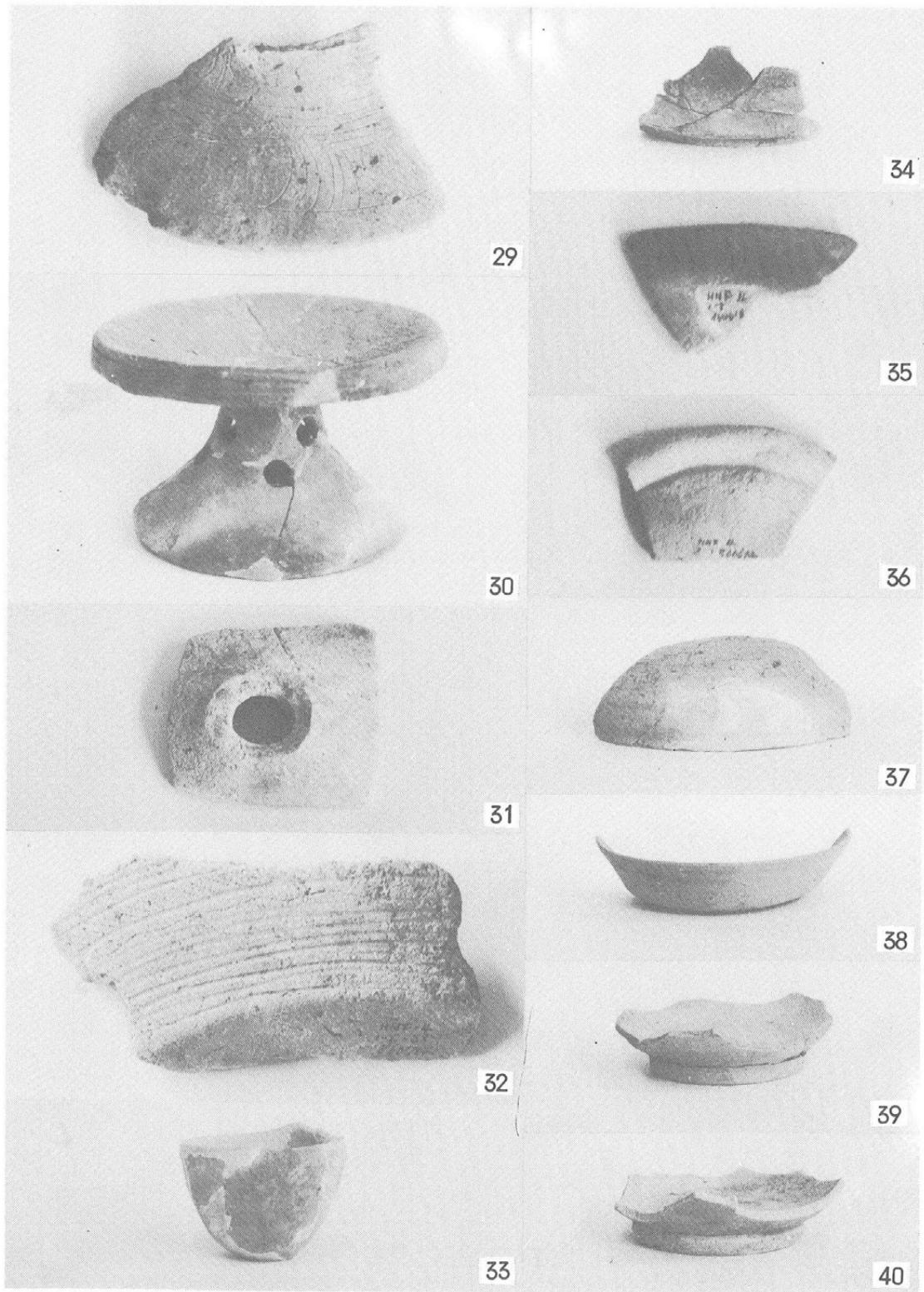


16

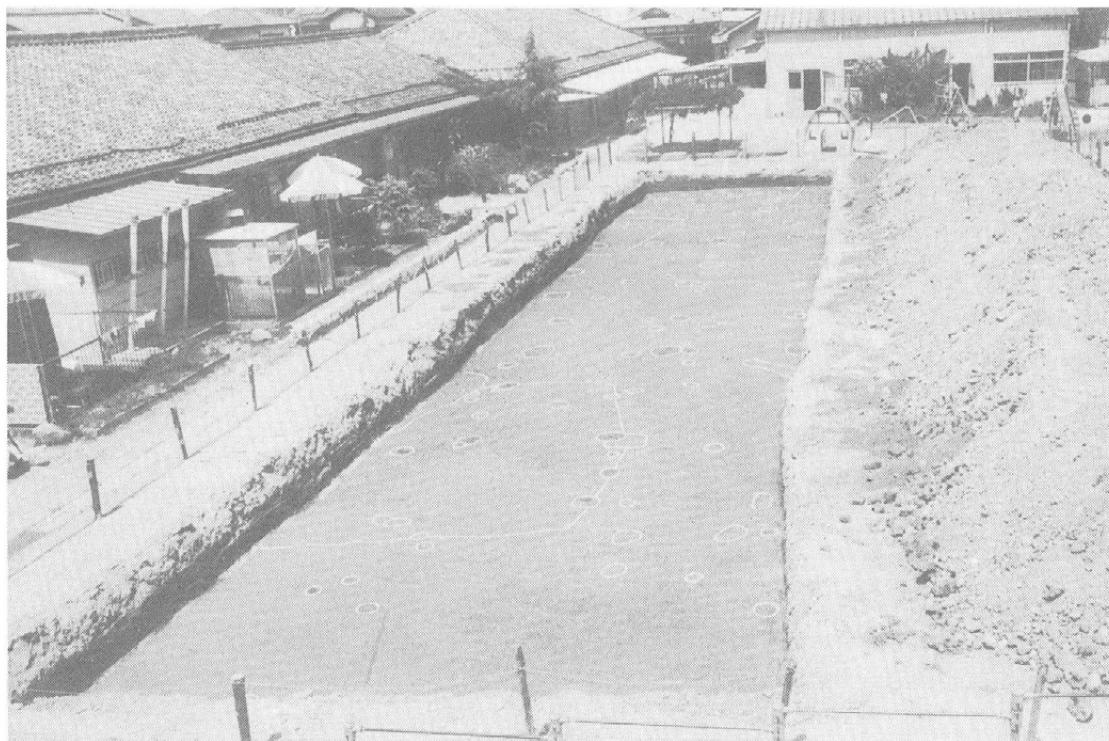
写真図版2 出土遺物



写真図版3 出土遺物



写真図版4 出土遺物

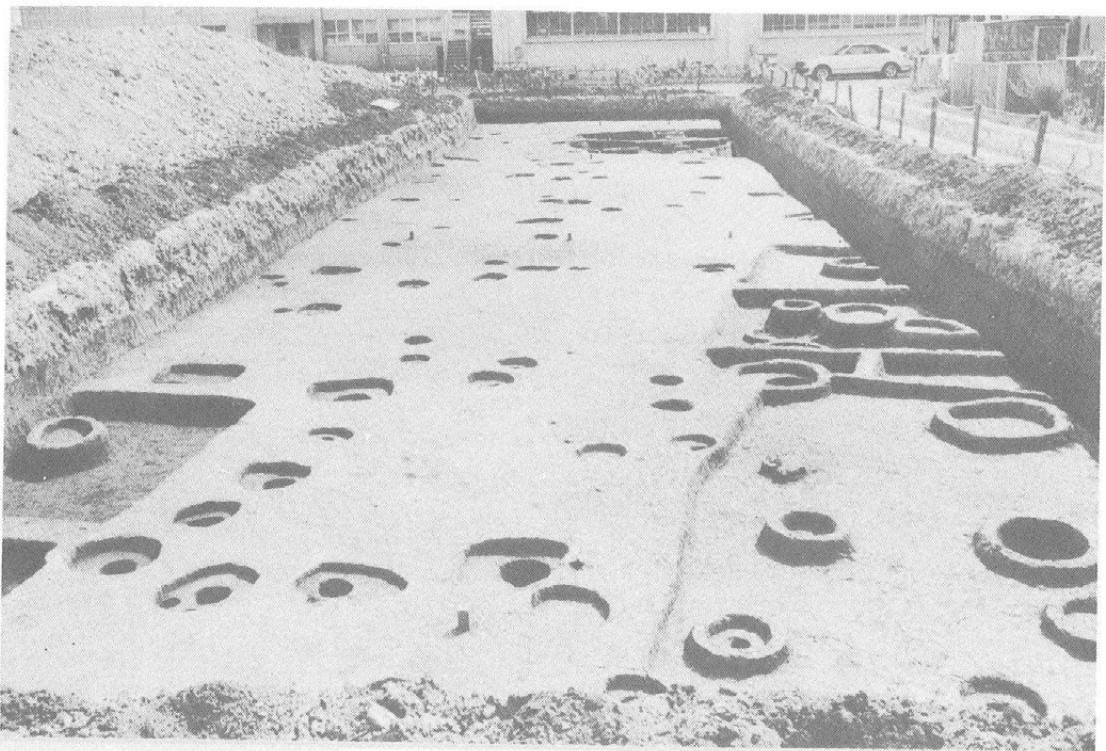


1 トレンチ遺構検出状況（南から）

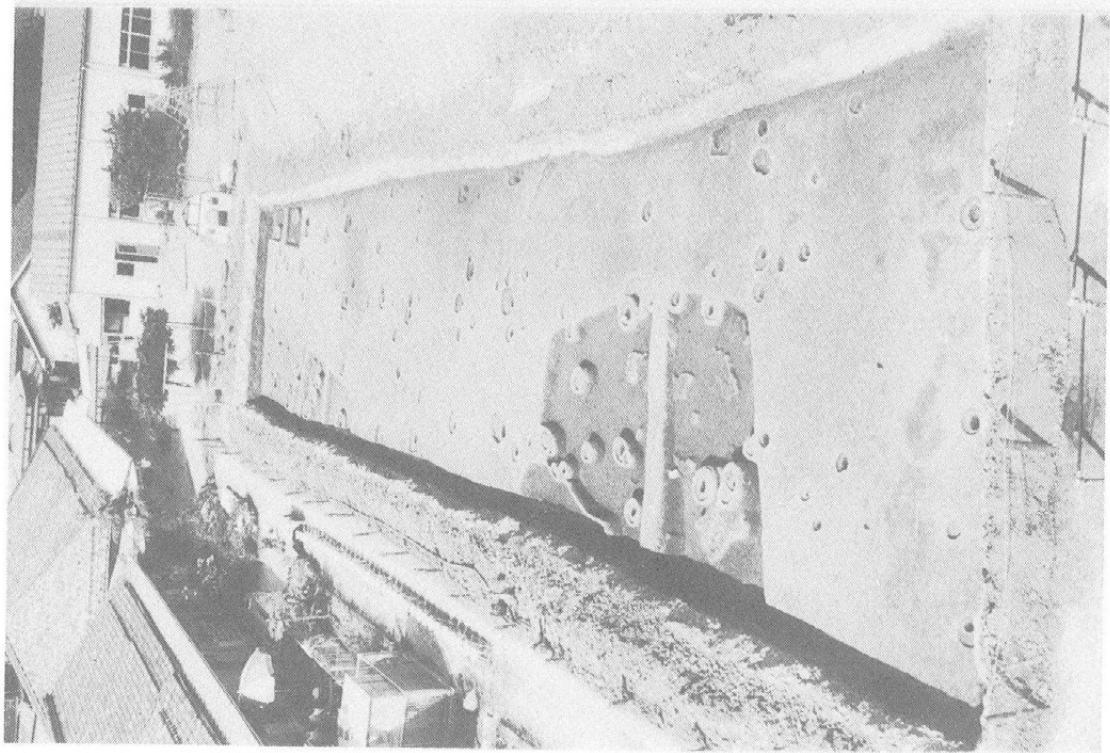


1 トレンチ遺構検出状況（北から）

写真図版 5



1 トレンチ掘り込み全景(北から)



1 トレンチ掘り込み全景(南から)

写真図版 6



SH-1 内遺物出土状況



ピット-98 遺物出土状況
写真図版 7



SH-1 検出状況



SH-1 掘り込み後

写真図版 8

彦根市埋蔵文化財調査報告第13集
福満遺跡発掘調査報告書

1987

編集 彦根市教育委員会
発行 彦根市教育委員会
印刷 (株)つくし出版印刷

